明日への扉 No.19

鹿児島の魅力を焼き物に込めて世界へ

古垣 彰拡 さん

昭和49年旧内之浦町生まれ。平成５年鹿屋高校卒業。平成16年「京の若手職人海外派遣事業」で多数の応募者の中から選ばれイタリアに派遣。独自の「釉裏金銀彩」技法を用いた作品などが評価され、昨年は銀座「香蘭社」や日本橋「髙島屋」で個展を開催。（41歳）

11月30日～12月６日に香港の日系デパート「SOGO」で行われる個展に向けた作品作りに現在励んでいる。会場では、昨年から親交がある、華道家の假屋崎省吾さんと一緒にフラワーショーも行う予定。

幼い頃から絵を描くのが好きで、高校では、美術部に所属して絵の基本的な知識を学び、大学では日本画を専攻しました。その後鹿児島市内の企業に就職しましたが、自分が学んだ「絵」を生かす仕事がしたいと思い、焼き物の絵付師を志して、28歳の時に京都の陶工高等専門学校に入学しました。

卒業後は、京焼の窯元で本格的に絵付けについての修行を開始。3年後、今の自分の仕事に大きな影響を与えた「截金」という技法と出会います。これは細かい模様に切り抜いた金箔で、仏像や仏画などを装飾する伝統技法。金箔は息で吹き飛ぶほど非常に薄く、手で触れることができないため、基本的な扱い方や切り方などを教室に通い学びました。

その後、「截金」技法と「釉裏金銀彩」という焼き物の装飾技法を組み合わせ、5年以上かけて独自の作風を完成させました。「釉裏金銀彩」は、1970年代に確立した日本独自の技法で、金箔や銀箔を陶器に焼き付け、その上から透明な釉薬を施し、再度焼成するものです。陶芸の歴史の中では比較的新しい技法で、手引書等が存在せず、教えてくれる人もいなかったため、釉薬の調合や焼き付けの温度などを何度も試行錯誤しながら独学で習得しました。

金箔や銀箔を切り抜く工程など細かい作業が多く、作品作りには大変時間と手間がかかります。また、窯自体の温度を設定しても、窯の上部と下部のわずかな温度の違いで失敗することもあり、気が抜けません。難しい分、思ったとおりの作品が出来上がった時の喜びは格別です。

平成23年、義父の病気を機に妻の実家がある鹿屋に移住し、開窯。そして昨年、人生で最も大きな出来事が起こりました。かのやばら園で行われた華道家の假屋崎省吾さんのフラワーデモンストレーションに、私の作った花器が採用されたのです。長年苦労して完成させたものが假屋崎さんに認められ、花を生けていただいたことは、何とも言えない喜びでした。またこれが、多くの人に作品を知っていただくきっかけとなりました。

現在「釉裏金銀彩」のほかに、薩摩焼きの絵付けや、鹿児島の空と海をイメージしたオリジナル作品「碧薩摩」の製作などを行っており、今後は海外へ作品を発信していきたいと考えています。作品を通して鹿児島の素晴らしさを世界中に伝えられたらと思っています。

FMかのや（77・2MHZ）
7月25日（月）9時5分から
古垣 彰拡さんが出演（予定）